今週の
倫理

2026. 11. 21〜11. 27

11 月のテーマ ｜ 良書に学ぶ

1517号

世の中には貴重な情報や知識を与える書籍が多くありますが、情報は時代の流れとともに絶えず変化していくものです。

情報は流行り廃りをもった「生きたもの」であり、時間の経過とともに古くなります。一方、読者の考え方の根本に大きな影響を与えるような本質的・普遍的な内容が記された書籍は、何度読み返しても新たな気づきを与えてくれるものです。

しかし、そのような良書に巡り合う機会は決して多くありません。倫理研究所の創設者・丸山敏雄は著書の中で、良書との巡り合いは人生の師との出会いにも通じるという趣旨を述べています。

すなわち良書は、良師の生命を、時を異にし、ところを異にして、無限に、無窮に伝えてくれるものであります。良師に直接つかえることのできません方々も、今日のように印刷術の進歩致した時代においては、良書によって自由自在に、古今の名家・書聖に相まみえることができます。

（『書道芸術』）



冊子との出合いを機に 活力ある社風が築かれた

O氏は、主婦として経営者の夫を支えていましたが、夫に先立たれた後、従業員四十名を超える会社のかじ取りを任されることになりました。何の知識も経験もないまま社長に就任したO氏は、相談相手もいない中で怒涛の日々を過ごし、気づけば就任から三年が経過していました。

その間、夫の残した良き社風が日を追うごとに失われるだけでなく、夫が信頼を寄せていた社員たちの心も少しずつ会社から離れていく様子を目の当たりにしました。勤務中にパチンコ店へ立ち寄ったり、営業先から散髪を済ませて戻ってきたりするなど、職場では問題行動が目立つようになっていたのです。

〈どうにかしなくては、この会社は駄目になる〉と感じたO氏は、同業者が企画した企業視察に参加しました。成長を続けているある企業を見学した際、受付に置かれていた『職場の教養』が目に留まりました。

その企業は『職場の教養』を朝礼の際に社員全員で輪読しているとのことで、内容も素晴らしく、〈我が社でもこの冊子（『職場の教養』）を使った朝礼に取り組めば、会社は必ず良くなる〉と直感したのです。

当初、『職場の教養』を用いた活力朝礼の導入には反対する社員もいました。実際に始めてみても、輪読する声は小さく、積極的に参加する社員はほとんどいませんでしたが、O氏はとにかく続けていきました。

やがて、三年が経過した頃から徐々に社員の読み上げる声も大きくなり、輪読後に感想を互いに共有するまでになったのです。

十年以上が経った現在は、社員同士の一体感が高まり、元気な挨拶が飛び交うようになっています。O氏にとって『職場の教養』は、亡き夫に代わって経営の指針を示してくれる伴走者となっていたのです。

一日一話の読み切り冊子は、時代に即した情報を得るためのツールとなり、倫理的視点を踏まえて綴られた文章は、社員一人ひとりの人間力向上に役立てられました。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局